

西谷地遺跡 発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1994-266-01

1994

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

1994

266

6

にしやち
西谷地遺跡
発掘調査報告書



094 - 266

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、西谷地遺跡の調査成果をまとめたものです。

西谷地遺跡は山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は古くから城下町として発展し、藩校致道館をはじめ多くの史跡や文化財があり、庄内平野における中心的な都市として今日に至っています。

調査では、鶴岡市街の西約5kmの所にある善宝寺の北方に広がる水田及び畑地から溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡などの遺構が検出され、土師器・赤焼土器・須恵器などの遺物が出土し、古代から中世の集落跡であることがわかりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。近年、高速自動車道路やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区域内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 潤耕

例 言

- 1 本書は主要地方道酒田鶴岡線の道路改良工事に係る「西谷地遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	西谷地遺跡（ATONY）	遺跡番号	平成3年度登録
所在地	山形県鶴岡市大字下川字西谷地		
調査期間	発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日		
現地調査	平成5年5月11日～平成5年7月20日		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当			

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 野尻 侑

調査研究員 斎藤 俊一

嘱託職員 飯塚 稔

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、庄内支庁建設部道路計画課、鶴岡市教育委員会等関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、斎藤俊一、飯塚 稔が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SA	……柱列	SB	……建物跡	SK	……土塙
SD	……溝跡	SM	……祭祀	SP	……ピット群
S	……礎	W	……木製品	RP	……完形・一括土器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、N-49° 50'-Eを測る。

(3) 遺構実測図は1/20、1/40、1/80、1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

(4) 遺物実測図・拓影図は1/2、1/4、1/8で採録し、各々スケールを付した。

遺物図版については原寸、1/3、1/4縮尺で採録した。

(5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

(6) 遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字は遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。

(7) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の層序	5
III 検出遺構	
1 遺構の分布	6
2 建物跡	6
3 溝跡	9
4 井戸跡	9
5 土壇	13
6 畝状遺構	15
7 遺構のまとめ	16
IV 出土遺物	
1 土師器・内黒土器	17
2 須恵器	17
3 赤焼土器	21
4 合口甕棺	23
5 その他の遺物	24
6 遺物のまとめ	28
V まとめ	29
報告書抄録	30

表

表1 出土遺物観察表	26
------------	----

挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡概要図	3
第3図 調査区土層断面図	5
第4図 遺構配置図	7
第5図 SD30溝跡	10
第6図 SD28・SD45溝跡	11
第7図 SE35・SE40井戸跡	12
第8図 土壇(1)	13
第9図 土壇(2)	14
第10図 畝状遺構	15
第11図 土師器・内黒土器実測図	17
第12図 須恵器実測図(1)	18
第13図 須恵器実測図(2)	19
第14図 須恵器実測図(3)	20
第15図 赤焼土器実測図(1)	21
第16図 赤焼土器実測図(2)	22
第17図 合口甕棺実測図	23
第18図 土鏝・髷羽口・砥石・丸玉実測図	24
第19図 灰釉陶器・珠洲系陶器他実測図	25

図 版

図版1 遺跡全景
図版2 遺構検出状況
図版3 溝跡・井戸跡検出状況
図版4 検出土壇(1)
図版5 検出土壇(2)・畝状遺構検出状況
図版6 合口甕棺・須恵器坏・内黒土器出土状況
図版7 須恵器(1)
図版8 須恵器(2)
図版9 須恵器(3)・赤焼土器(1)
図版10 赤焼土器(2)・土師器
図版11 土鏝・髷羽口・砥石・丸玉・灰釉陶器・青磁・珠洲系陶器
図版12 SE35・40井戸跡出土遺物・合口甕棺

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

鶴岡市北西部の水田地帯に位置する西谷地遺跡は、水田の間に点在する畑地から土器が表採され、現在使われている用水路からも土器片が度々出土している。

遺跡として確定されたのは、昭和31年頃行われた暗渠管の埋設工事や水田盤下げ工事で土器が出土したことに始まる。昭和62年度から、これら遺跡群を含む鶴岡西部地区県営ほ場整備事業が実施され、矢輪A・B遺跡、清水新田遺跡等の緊急発掘調査が行われ、ここで検出された古墳時代の遺構・遺物は斐津古墳に何らかの関連があるものと考えられた。西谷地遺跡は主要地方道酒田鶴岡線の道路改良工事に伴い、山形県教育委員会が平成3年度に行った遺跡詳細分布調査によって確認、登録された遺跡である。

平成4年6月の表面踏査と同年10月の試掘調査の結果、土師器・赤堇土器・須恵器などの遺物、柱穴・溝跡などの遺構が広い範囲で検出され、畑地を中心に東西200m・南北360mを遺跡範囲とする平安時代の集落跡であることが推定された。

平成3年度の登録時点で本遺跡は下川3遺跡と称していたが、平成5年3月から小字名をとり西谷地遺跡と改定された。教育庁文化課及び庄内支庁道路建設課と協議を重ねた結果、平成5年度に緊急発掘調査を実施する運びとなったものである。

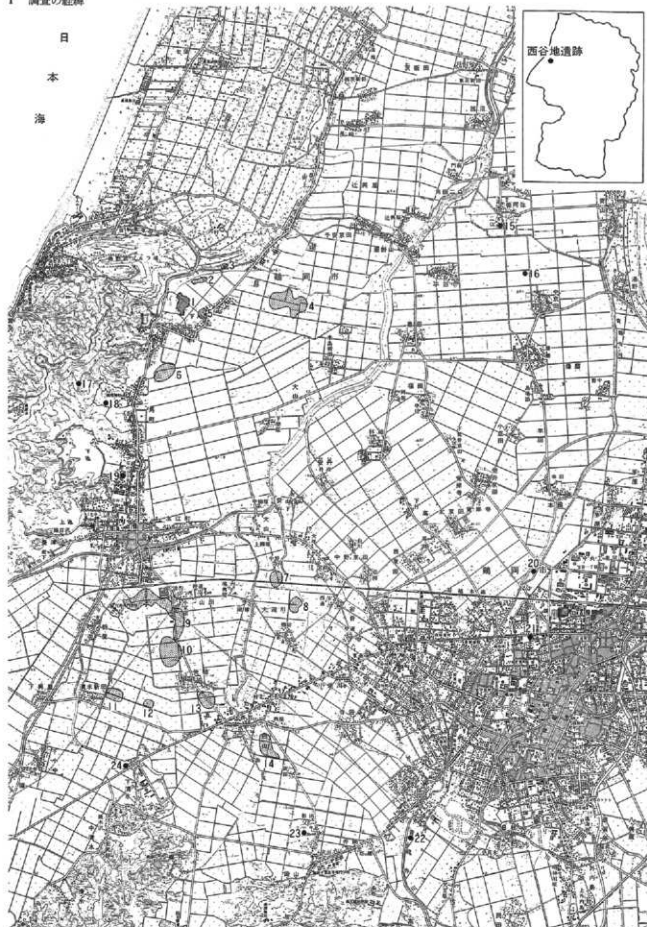
2 調査の経過

調査は、平成5年5月11日に始まり7月20日までの実質50日間行った。遺跡全面積約32,000平方mのうち、主要地方道酒田鶴岡線の道路改良工事に係わる幅20m・長さ170mの3,400平方mについて精査の対象地区とした。

5月11日現地に資材等を搬入して調査を開始する。調査区の中央部分＝道路のセンター枕No103～No104を結んだ直線を基本グリッド(Y-28ライン)として、1m×3mのトレンチ9本を設定した。以下現地調査の経過を略記する。12日から調査区の確認、1m×3mのトレンチをセンターライン20m毎に9本設定、遺物包含層及び地山の確認を行う。17日調査区南側にトレンチを設定。試掘による土層観察をもとに19日から重機による粗掘りを実施、その後3m×3mを1区画とするグリッド(方眼区画)を設定し併せて面整理も開始する。24日から調査区北・中央の粗掘りと面整理・遺構の精査を行う。31日遺構確認のため北側の畑部分を5cm程掘り下げ、柱穴・溝跡の検出を行う。

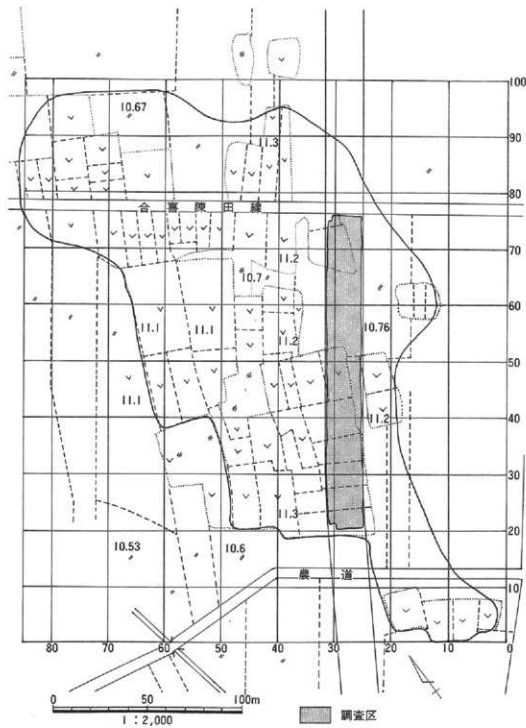
6月1日平面図作成・写真撮影・遺構の精査を行う。7日溝跡の精査・平面図断面図の作成、写真撮影を行う。14日南側部分の掘り下げ・遺構精査・土層断面図・写真撮影を行う。22日北側・南側の遺構検出、マーキングを行う。28日から土壌の精査、記録を行う。

7月5日土壌の精査を行う。12日面削り・溝跡の完掘・建物跡の確認を行う。15日調査説明会は関係者を含め71名の参加をえて開催した。7月20日現地調査を終了し、器材の搬取を行った。



- (S = 1 : 50,000)
- 〔遺跡名〕
 1. 西谷池(平成5) 4. 五百崎(平成5) 7. 中野(平成6) 10. 矢倉 A(昭和55) 13. 船倉(平成2) 16. 中倉田 ● 19. 大山西 ● 22. 番田 ● ●
 2. 西の川 5. 西田田 8. 畑田(平成8) 11. 清水新田(昭和52) 14. 田畑田 17. 越中田 ● 20. 日本屋 ● 23. 井原新田 ● ●
 3. 橋 6. 八幡田 9. 自田(平成1) 12. 矢倉 B(昭和52) 15. 二口 18. 馬型 ● 21. 新影 ● 24. 新南山田 ● ●

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡概要図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

西谷地遺跡は、庄内平野の西部に位置し、鶴岡市街の北西約5km豊宝寺の東方に所在する。西には高館山をはじめとする標高150m～280mの丘陵地帯、南方は金峰山(458.5m)など200～400m級の山地に囲まれ、湯の新温泉からは砂丘をはさんで約2km南東の地点にある。標高約11m前後の低湿地に立地し、南から東側を大山川が北流している。現在みられる付近の地形は、一部の畑地を残して平坦な水田地帯となっているが、かつては大山川などの流路変遷や河川の氾濫と共に幾筋もの微高地及び低湿地が形成されていたと推測される。歴史時代以降に人々の努力により土地の平坦化が進められる前は、微高地と低湿地が入り組んだ複雑な地形が形成されており、人々の暮らしはこれら微高地に集落を作り、低湿地を田地として生活が営まれていたものと考えられる。調査は砂丘に近い畑地を中心に、一部水田を含む範囲である。確認されている遺跡全体から見れば、本調査区は集落の東縁に位置すると推定されるが、建物跡・井戸跡をはじめ多くの遺構が検出された。更にこの集落跡は西に広がるものと考えられる。

2 歴史的環境

庄内地方での古墳時代の遺跡は、古墳・集落跡・包蔵地その他10数箇所の遺跡が確認されており、これらの半数以上の遺跡は今回調査の対象となった西谷地遺跡と同じ西田川郡域に存在している。

古墳時代の遺跡としては明治43年に発見された6世紀前半と推定される菱津古墳の存在が知られており、「変形長持形組合式石棺」が出土した。この地域における有力家系の存在ならびに背景としての集落の所在を想起させる。

『書紀』にある斉明4年(658)の「都岐沙羅羅」に関連を有する遺跡や『続日本紀』に記載されている和銅2年(709)の「出羽櫛」や和銅5年(712)の「出羽国」は内陸部をまだ含まない庄内地方に拠点を置き、海沿いに勢力を発展・拡大してきたものであろうと推察されるが、その成立過程は未だ解明されていないのが現状である。

本遺跡の発掘調査は奈良・平安時代の出羽郡から出羽郡・出羽国、さらには天平5年(733)秋田城が建置され、東北への律令制支配が及ぶ過程を考えるうえで貴重な資料が得られると期待される。

西谷地遺跡のある下川地区には他に「西の川遺跡」「西田面遺跡」「五百刈遺跡」「橋渡遺跡」が既に確認されており、また、周辺には「八幡田遺跡」「中野遺跡」「畑田遺跡」「矢馳A・B遺跡」「助作遺跡」「清水新田遺跡」等があり、古墳時代から奈良・平安時代にかかる遺跡である。鶴岡西部地区が先の「出羽櫛」の置かれた擬定地か背景地として可能性が大であることを想起させる。

3 遺跡の層序

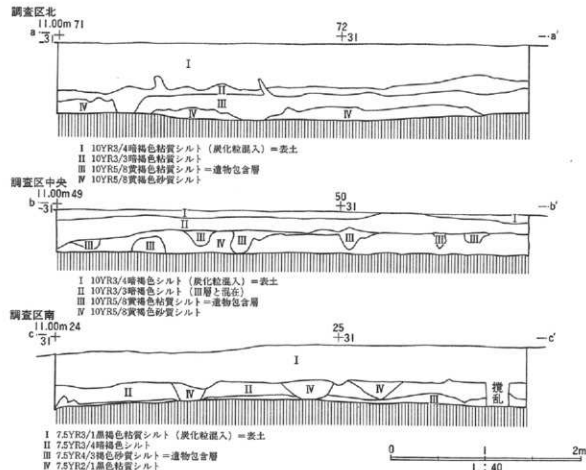
調査区内で観察された基本的な層序は第3図のとおりである。遺物は耕作等による攪乱のためI層中に混入するものもみられるが、主体となる遺物包含層は調査区北と調査区中央ではIII層であり、調査区南ではII層である。遺存状況は調査区北が殆ど攪乱を受けていない遺構検出は良好であったが、調査区中央は攪乱をかなり受けている。水田部分は削平され遺構が検出されない。層序的には調査区北と調査区中央はほぼ同一と考えられ、調査区南は検出面が低く、微高地の縁辺部から低湿地への移行部分のため砂層が多く観察される。以下本遺跡の層序について調査区北・調査区中央と調査区南に分けて記述する。

[北側・中央部分]

- I層 10Y R3/4暗褐色粘質シルト(炭化物粒子を含む・耕作土)
- II層 10Y R3/3暗褐色粘質シルト(炭化物粒子を含む・遺物包含層)
- III層 10Y R5/8黄褐色粘質シルト(粘性が強い、地山)
- IV層 10Y R5/8黄褐色砂質シルト(地山)

[南側部分]

- I層 7.5Y R3/1黒褐色粘質シルト(炭化粒の混入・耕作土)
- II層 7.5Y R3/4暗褐色シルト(炭化物粒子を含む・遺物包含層)
- III層 7.5Y R4/3褐色砂質シルト(地山)
- IV層 7.5Y R2/1黒色粘質シルト(遺構にかかる覆土)



第3図 調査区土層断面図

III 検出遺構

1 遺構の分布

本調査は東西20m・南北170mにわたる区間、面積にして3,400㎡を発掘調査した。そのうち25～31-55～65Gに位置する中央の水田部分は溜平を受けて検出されなかった。畑地部分からは比較的良好な遺構の検出をみた。なかでも調査区北の畑地からは掘立柱建物跡1棟をはじめ、須恵器主体の溝跡、畝状遺構、井戸跡などを検出した。これら遺構は水田南・東部分にも延びており、本来はそこにも遺構は存在したと考えられる。調査区全体を通して、建物跡の近くから遺物が多く出土しているが、砂の堆積に拠るものか、柱列の確認にとどまった。概観すると遺構が集中しているのは3地区である。調査区北のSD35井戸跡及びSB1建物跡の付近、そして中央のSD28溝跡及びSE40井戸跡付近、南の土墳及びSA4建物柱列の付近である。遺物もそれに対応する形で集中的に出土している。全体では土墳が30数基、井戸跡2基、溝跡3条、掘立柱建物跡1棟及び柱列3列、畝状遺構10条を確認している。これらの遺構はさらに西への面的な広がりをみせている。

2 建物跡

SB1 掘立柱建物跡

調査区北の27～30-67～69Gに位置する。南北軸はN-47°50'-Eである。SD30溝跡を跨ぐ形で建っており、この溝が埋まって以後のものと考えられる。柱穴掘方は径約48cmで、深さは40cm程度、間尺は2.4m(8尺)を測り、桁行3間×梁行2間の東西棟である。南柱列の内側にはもう1列柱穴があるが、間尺約1.8mで先の建物とは異なる。建物跡及び付近からは須恵器と赤焼土器の坏・壺などが出土している。建物南柱列はSD46に重なるが、2つの柱穴はこの溝を切っており建物の方が時間的には新しいことになる。当初この建物は更に北に延びると想定したが、間尺の違い等から一応分けてとらえておきたい。

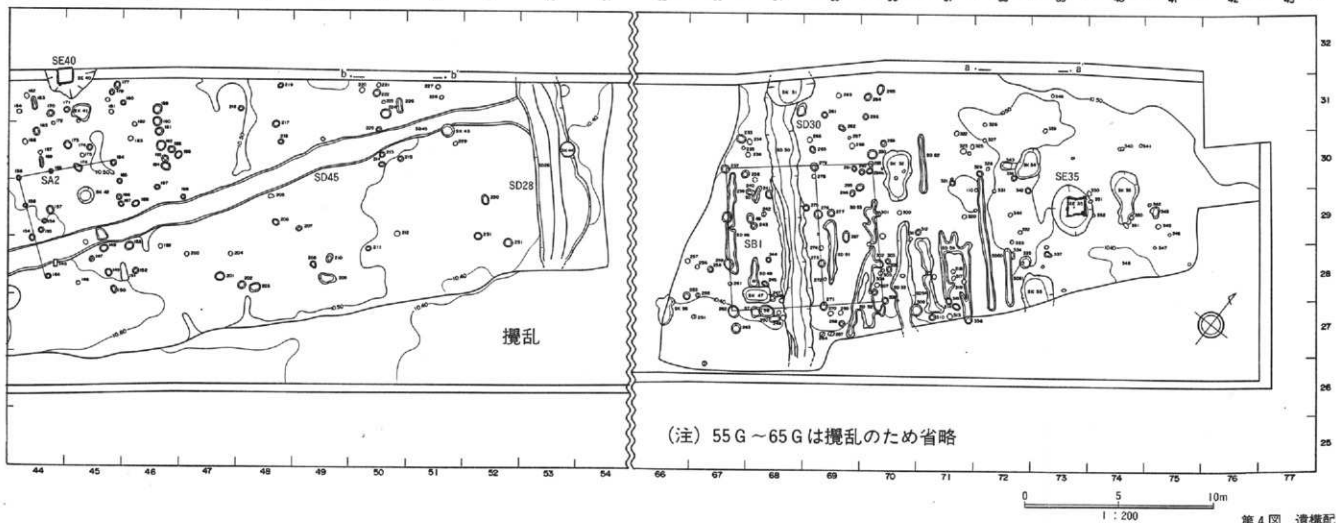
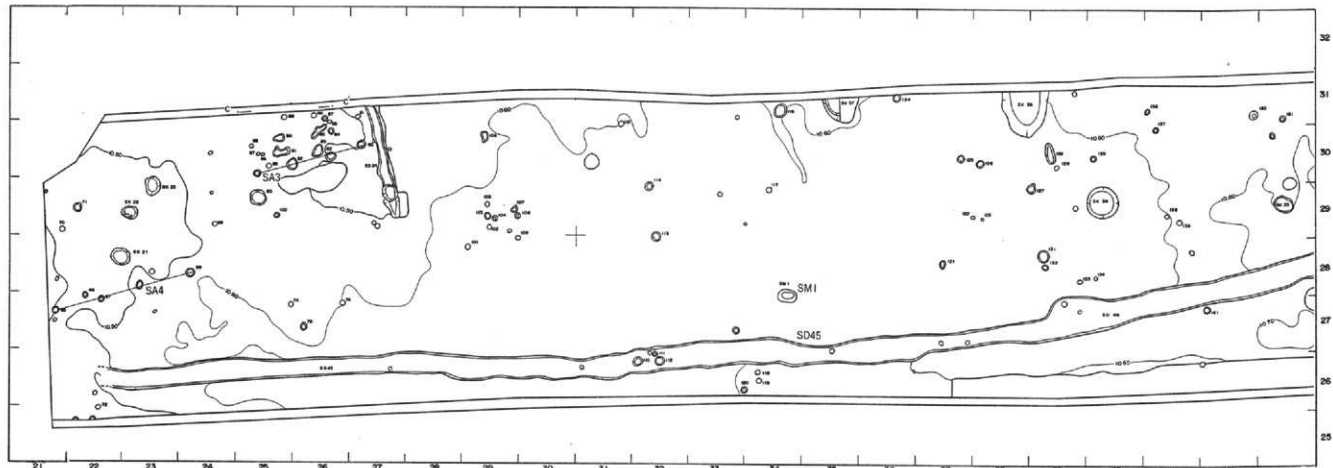
SA2 柱列

調査区中央の28～30-44～45Gに位置する。南北軸はN-38°50'-Eである。掘立柱建物跡の柱列と考えられるが、南と西面のみで全体は明らかでない。柱穴掘方は径約24cm～40cmで、間尺は1.8m(6尺)前後で桁行・梁行とも3間の建物跡のようだが、柱穴などから推して付屬的なものだろうか。また、近くには底から珠洲系陶器壺が出土しているSE40井戸跡があり、中世の建物跡という可能性も考えられる。

SA3 柱列

調査区南の30-27Gに位置する。南北軸はN-33°50'-Eである。柱穴は径約48cmあり、間尺は1.8m(6尺)前後である。柱列東からは土師器坏(第11図2RP6)が出土している。SA4柱列

調査区南の27-28-21～24Gに位置する。南北軸はN-33°50'-Eで先のSA3と同じ傾きである。柱穴の径は約40cm前後で間尺は約2.4m(8尺)である。東面以外確認できなかったが、掘立柱建物跡の柱列と考えられる。遺物は赤焼土器が主体である。



第4図 遺構配置図

3 溝跡

S D 30 (第5図)

調査区北の26-68Gから32-68Gに位置している。幅1.6m前後、深さは64~74cm程度で東から西に流れていたと推定される。31-69GのS K 31土壌は位置的にみてこの溝の downstreamに連なるが、性格は判然としない。

この溝は捨て場になっていたらしく、30-68G付近の3層を中心に底部へラ切りの須恵器が多く出土した。S B 1掘立柱建物跡はここを跨ぐ形で建っているが、この溝が埋まった後に建てられたものであろう。赤焼土器環を底に有するS E 30井戸跡と比較して、溝は年代的にそれ以前に機能していたと考えられる。同時期に比定される遺構が目目される。S D 28 (第6図)

調査区中央の28-53・54Gから31-53・54Gに位置している。幅は最大2.8m、深さは64~94cmを測り、東から西に流れていたと推定される。溝からは土師器高坏から珠洲系陶器、かわらけにいたる遺物が出土しており長年にわたって機能してきた溝と考えられる。鉄滓や砥石も出土しており、周辺での鍛冶場の存在も窺える。27-54Gより東については水田による削平を受けており範囲を確定し得ないが、溝は更に東西に延びる。

S D 45 (第6図)

調査区南の26-22Gから先のS D 28に流れ込む。幅は1m前後、深さは20~30cm程度で比較的浅い溝で、覆土は砂質である。とくに39Gより北の区間で遺物が多く出土した。45G及び46G付近における多くの鉄滓の出土が目目される。また、溝の下から例えば32Gにみられるようなピット(第4図)が検出される。おおよそ遺構はこの溝東では検出が希薄であり、溝が阿らかの境界的な機能を果たしていたように思える。

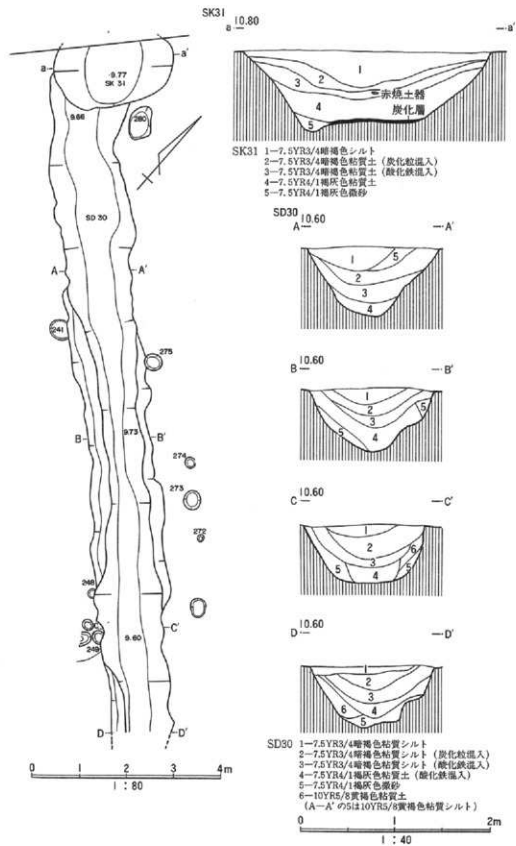
4 井戸跡

S E 35 (第7図)

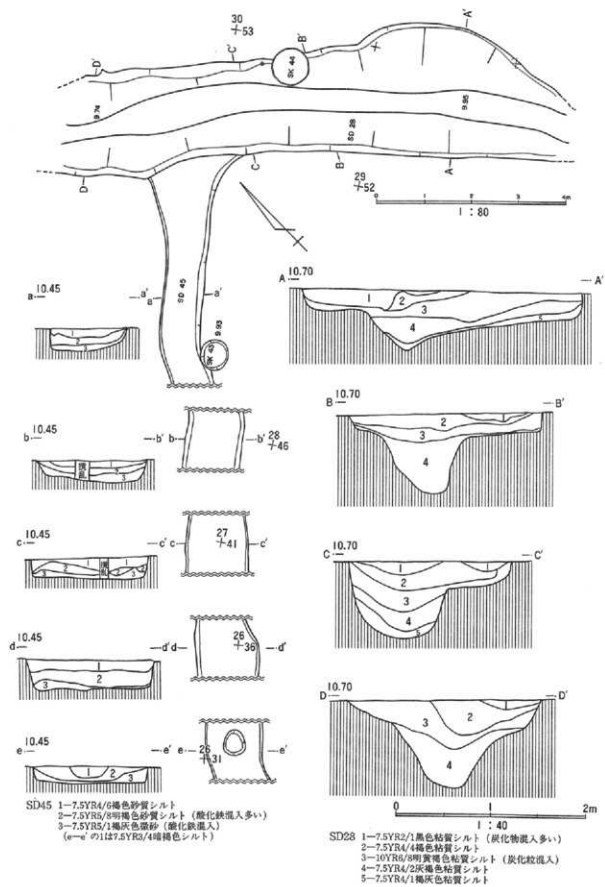
調査区北29-73~74Gに位置している。井戸上部から須恵器環、底部からは赤焼土器環及び皿の完形品が出土した。何れも底部は回転糸切り離しであるが、その内皿以外の2点については墨書が付されており、赤焼土器環は煤痕があり燈明用として使われていたものと推定される。井戸枠は1m四方で一辺あたり幅25cm程の縦板(杉材カ)約10枚が打ち込まれ、これら矢板と横棧で構成されている。何れも手斧削りである。その他の木製品は検出されなかった。土器から前述したS B 1掘立柱建物跡との関連が想起される。同様に近くのS K 36からは同じ器形をもつ赤焼土器環が多く出土した。

S E 40 (第7図)

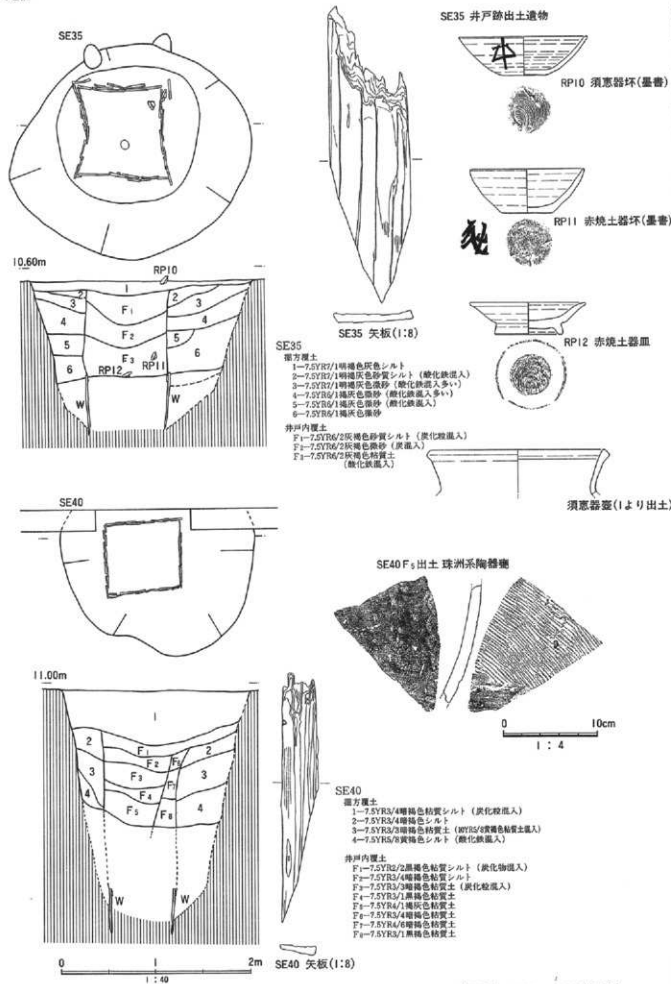
調査区中央31-44~45Gに位置する。西辺が隣接の畑にかかり、井戸枠を確認するととどまり掘方の範囲を特定できなかった。覆土の状態からかなり攪乱を受けている。遺物としては珠洲系陶器環1点のみである。井戸枠は約80cm四方で一辺あたり幅20cm前後の縦板(杉材カ)約10枚で作られ、矢板・横棧構成である。中世の井戸跡の可能性がある。



第5図 SD30溝跡・SK31土壇



第6図 SD28・SD45溝跡

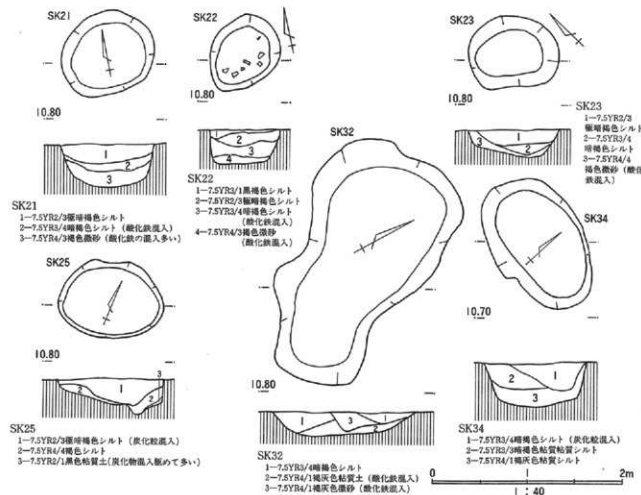


第7図 SE35・SE40井戸跡

5 土壌 (第8図・9図)

調査区全体で30基以上の土壌が検出された。その内SK21~25、SK37~44は調査区南及び中央部に所在する。調査区北ではSK32~36、SK47、SK56~58が検出された。これら土壌は総じて掘立柱建物跡か柱列の近くに集中しており、深い関連があるものと思われる。共通しているのはその大半から須恵器と赤焼土器の環・壺が出土していることである。一方所から多量に出土するものはなく、捨て場として使われているところは見受けられない。SK21~23はSA4柱列の近くで、この建物とは関連を有すると思われる。砂の堆積が見られる。SK25からは19図4の回転糸切り離しの燈明皿風かわらがけが出土している。焦土壁は確認されなかったが、底には厚い炭化層がある。SK37・38はかなり攪乱を受けているが、SK37は東面において青灰色の粘質土の堆積が見られたため、SD45との間にトレンチをいれたところ、溝跡と思われる断面が確認され、SK37とSD45は溝でつながる。SK37土壌は調査区北のSK31と同じような性格のものとして推定される。

調査区北のSK32及びSK36からは供膳・煮沸形態の赤焼土器が須恵器に比べ多く出土している。SK55は水田の削平により東側が判然としないが、炭化層をもつ。SK56も南側が水田のため明確ではないが、赤焼土器環が出土している。



第8図 土壌(1)

7 遺構のまとめ

以上今回の発掘調査で検出した主要な遺構をとりあげて述べてきた。南北に細長く、東西に狭小という制約を受けながらも、多様な遺構が検出され興味深い。

建物跡・柱列の南北軸の比較から、三時期が考えられる。周辺の遺構もこれら建物跡乃至柱列と密接に関連を有すると推定される。出土遺物の様相・組成からみても、調査区の北と南そして中央のそれぞれには時期的な相違が感じられる。3条の溝跡SD30、SD28そしてSD45の分析、比較検討が課題となる。この内年代的に最も長く機能していたのはSD28である。土師器高坏・ヘラ切り離し須恵器坏から珠洲系陶器・かわらけまでの遺物がそれを物語る。農業経営のみならず人々の日常生活と水（溝或いは河川）との関わりを深さをあらためて考えさせられる。

このSD28が実際に機能し、それを利用して中世の集団が近くに存在しているのではなからうか。底から珠洲系陶器壺が出土したSE40井戸跡がそれを裏付けている。更にその井戸の周囲にはSA2柱列をはじめ土壇、ピットが集中している。ただ、これら遺構が平安期から連続するものなのか、また、平安期以前の遺構については今後とも検討課題となる。前述したようにSD45がもつ境界的な機能も他の遺跡との比較検討がなされるべきと思う。合口壺棺が出土した地点もこの溝の近くであり、偶然ではないような気がする。調査区北の遺構もまた時期的な幅を感じさせる。SD30と竈状遺構、SB1掘立柱建物跡とSE35井戸跡・SK32及びSK36土壇の間には出土遺物や遺構の切り合い等から差異が窺える。年代的にはSD30が最も古く、その後にはSB1及びSE35・SK32・36という組成が推測される。

調査区南の26~30-22~28Gはとくに砂の堆積が多く、覆土が殆ど砂質であることから幾度かの水害を被っているのではなからうか。他の所と比べて一段低い所に位置していたと考えられる。この地区は赤焼土器が主体的に出土し、須恵器は貯蔵形態に多くみられる特色がある。

IV 出土遺物

1 土師器・内黒土器 (第11図)

数量的に少ないが、土師器が調査区中央及び南で出土している。SD28・SD45からの出土が多い。高坏やミニチュア土器などから古墳時代から奈良時代の遺物と考えられる。第11図4の壺は酒田市生石遺跡出土のものに近似しており、奈良時代を想定している。

今年度の発掘調査にかかる同じ下川地区の五百刈遺跡においても古墳時代後期6世紀の竈穴住居を伴う集落跡が確認されている。矢馳A遺跡、清水新田遺跡等においても既に報告されており、鶴岡における当該期集落の様相が次第に解明されつつある。

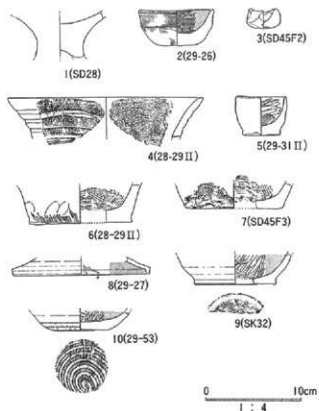
内黒土器では第18図8蓋が目されるが、須恵器と赤焼土器の出土量に比べて著しく少ないことが本遺跡の特色ともなっている。

2 須恵器 (第12~14図)

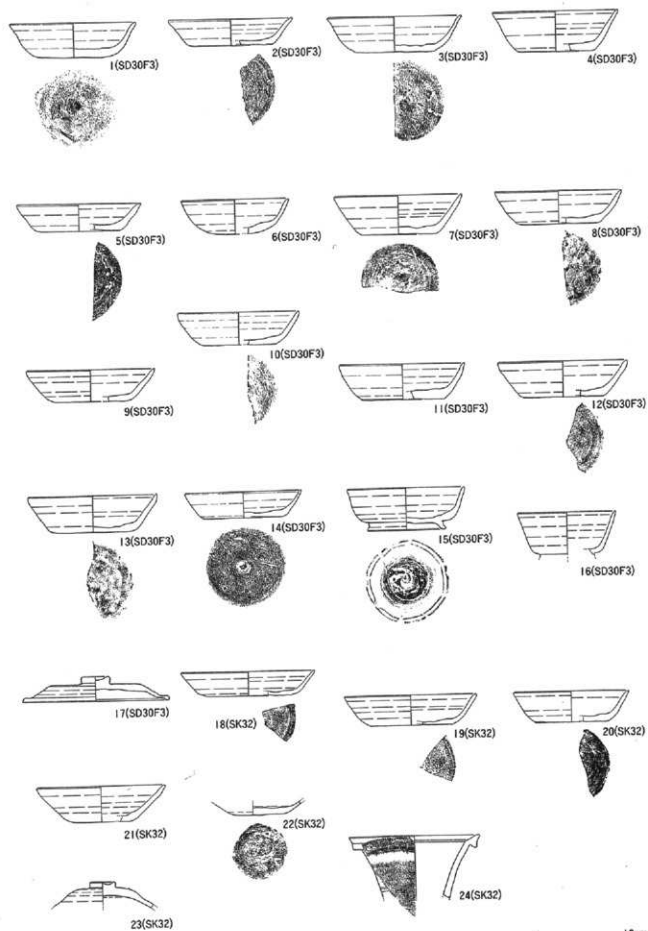
調査区全体から共通して出土している。底部の切り離しから大きく分けてヘラ切り技法と糸切り技法によるものがある。楕円形としては坏・高台付坏・蓋・壺・甕・横瓶などがあるが、須恵器は特に調査区北から最も多く出土し、続いて調査区中央、南という順になる。SD30溝跡からの出土が多い。その大半は底部ヘラ切り離し・無調整で、糸切りは著しく少なく、口径に比して底径が大きい。出土層位、法蓋、口縁部の外反・内弯などを含め総合的な見地から庄内地方の土器編年が試みられているが、本遺跡の年代としては9世紀初めから11世紀が推定される。

墨書が付された須恵器は前掲SE35井戸跡出土のものと同28-44G出土の坏2点何れも完形である。SE35のものが回転糸切り、28-44Gのものはヘラ切り離しである。

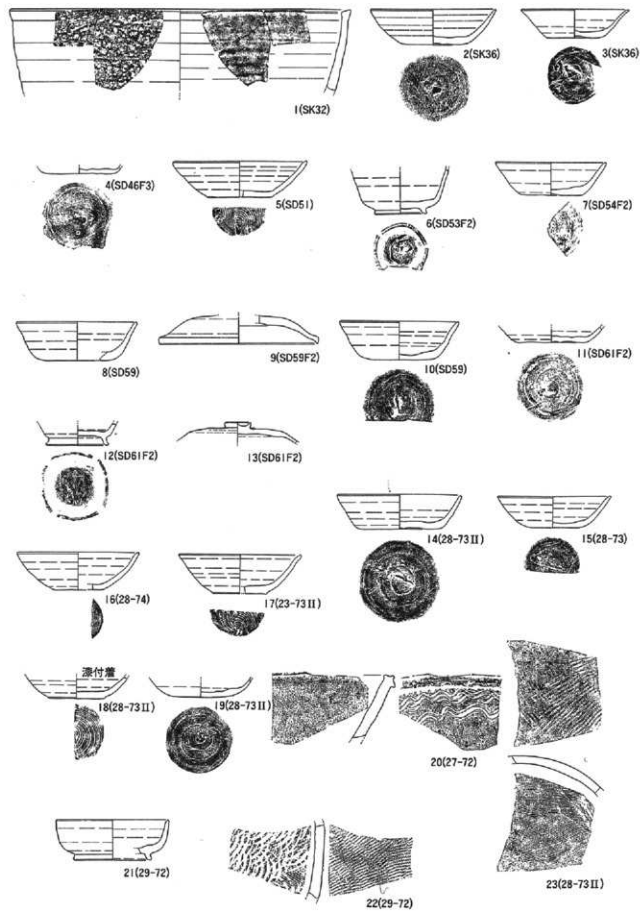
おおよそSD30溝跡とSD28溝跡出土のものも古く、次いで調査区北で広範に出土するもの、調査区南(坏の出土が極端に少なく貯蔵形態が主)、SE35井戸跡というようになるのではなからうか。SE35井戸跡では底から赤焼土器皿・坏が、上部から須恵器坏が出土しているが、年代的には10世紀前後と推定される。土器組成を考える際、興味深いことである。



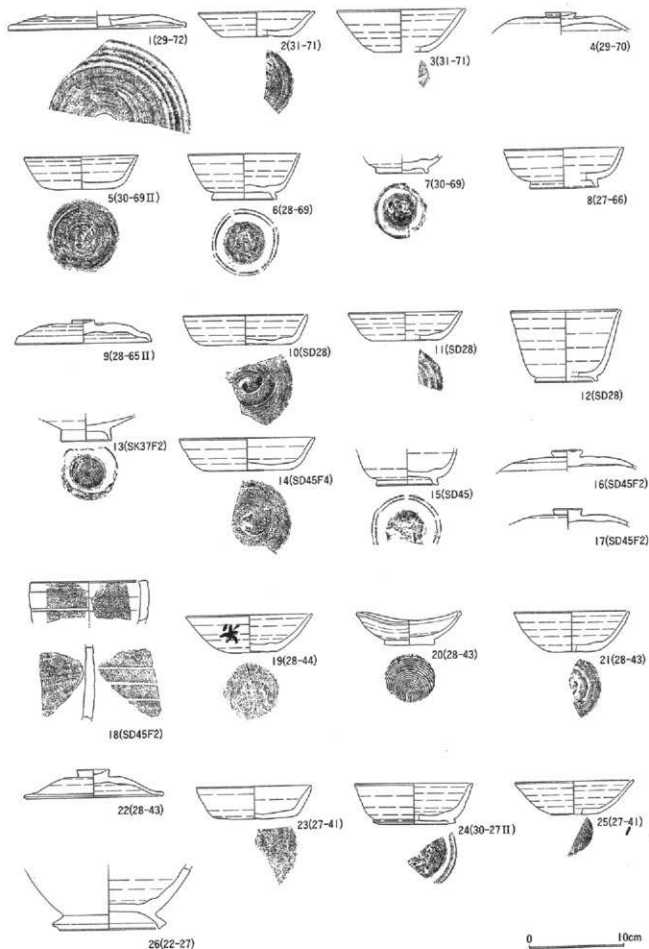
第11図 土師器・内黒土器実測図



第12図 須恵器実測図(1)



第13図 須恵器実測図(2)



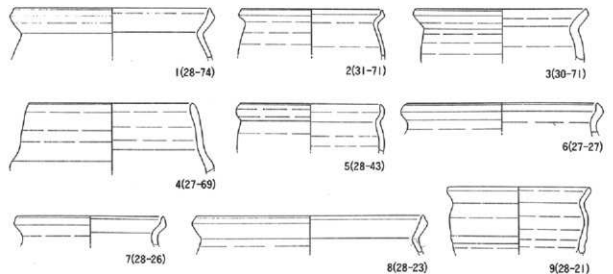
第14図 須恵器実測図(3)

3 赤焼土器(第15・16図)

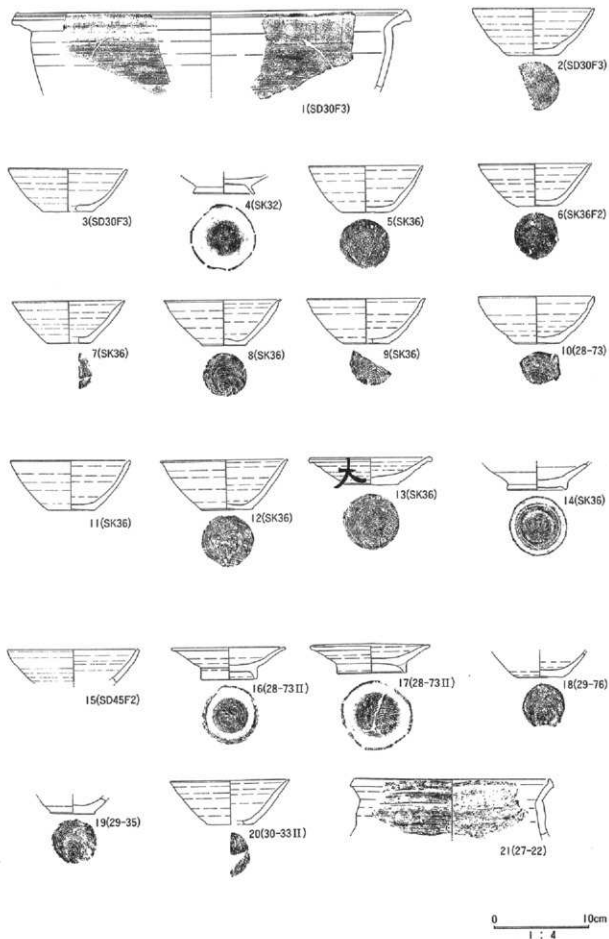
須恵器と同じ技法を用いながら、酸化炎焼成を行っている赤色の土器を赤焼土器と称している。器種は供鬮形態で須恵器と競合するが、火熱につよく煮沸形態がみられる。調査区全体で出土しているが全て底部は回転糸切り産品である。環は横して口径が130cm前後、底径は50cm前後である。赤焼土器も調査区北において多く出土している。なかでもSK36の東部分から完形にちかいものが比較的多く出ている。先に須恵器のところで述べたが、本遺跡ではSD30溝跡が年代が古く、しかも早い段階で埋もれたようだが、その第3層から出土した第16図2・3の環が注目されよう。ヘラ切り産品の須恵器よりは新しいが、糸切りの須恵器環に先行する。また、SE35井戸跡の底から出土した第7図2・3の環及び皿も年代を探る手掛かりとなる。先の第7図RP11須恵器環よりはこの環と皿の方が古いと考えられる。口縁部は外反するものの方が一般的には年代が新しいとされているが、第16図20の環が該当するようである。本遺跡では高台付環は所見しないのも特色である。煮沸形態の口縁を見た場合は年代の古い方から調査区北→調査区南→調査区中央の順になるのではなかろうか。第15図4の土器が注目され、壺というよりは土管状であり、県内では類例を見ない遺物である。

調査区南においては赤焼土器の出土量が須恵器の倍以上となっており、供鬮形態では赤焼土器が主体的で、調査区北とは対照的である。

後述する合口壺棺にも赤焼土器壺が転用されている。



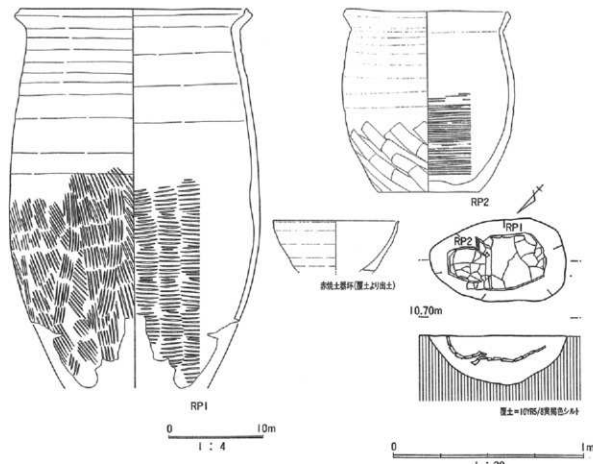
第15図 赤焼土器実測図(1)



第16図 赤焼土器実測図(2)

4 合口壺棺 (第17図)

調査区中央に位置し、遺構の検出が希薄なところの27~28-34Gから出土した。上半分が散逸しているが、下半分が合口の状態のまま見つかった。掘方は長軸約70cm・短軸約44cmの楕円形を呈し、船底状の壺底を有す。主軸方向はN-50°-Eである。周辺の高さは10.63mを測るが、出土面はこれとほぼ同じである。ということは上半分は露出することになり、この壺棺には盛土がなされていたのかもしれない。2個体の壺の口縁部を合わせて棺としているものを合口壺棺と称しているが、古くは縄文時代からその形態が見られる。庄内地方では藤島町平形G遺跡、平田町山海窓跡群、余目町千河原遺跡に続き4例目の出土となる。平安期の葬送形態を探るうえで興味深い遺物である。合口壺棺はある特定の用途をもつて使われたと思われ、乳幼児か嬰兒の亡きがらを葬ったという説がある。いずれも赤焼土器丸底長胴壺が用いられている。大きい方の壺は赤焼土器の長胴壺で器高46cm、口径24cmでロクロ成形後に叩いて調整されており、条線状の叩き目とアテ痕がある。底部は欠けているが丸底と推定される。体部に煤痕があり、煮沸用として既に使われていたものを転用したと思われる。小さい方の壺は赤焼土器で器高19.3cm、口径17cmであり、平底でロクロ成形後に底部にクズリ調整がなされており、体部には煤痕が見られ煮沸形態のものも転用していると思われる。年代的には9世紀後半~10世紀前後と推定される。PR1長胴壺の下から二次火熱の痕跡のある赤焼土器片が出土した。後世に入り込んだというより合口壺棺と期を同じくして埋められたものと考えの方が自然ではなからうか。



第17図 合口壺棺実測図

5 その他の遺物

その他の遺物として、土製品・石製品・施釉陶器・中世陶器等が目される。本遺跡は砂丘を隔てて、海に近いこともあり、網の錐として使われた土錐が調査区南及び中央から計5点出土している。

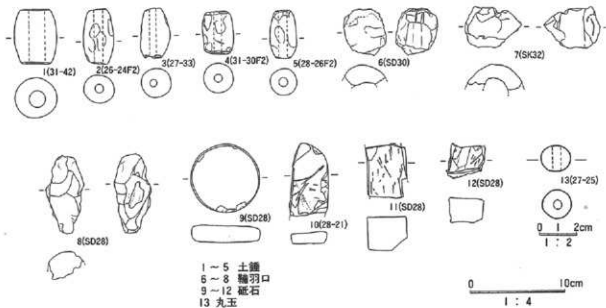
石製品としては砥石がSD28を中心に4点出土した。また、籬の羽口も調査区北のSD30及びSK32、南のSD28からそれぞれ出土しており、規模の大きい専門集団とはいえないが製鉄か鍛冶の存在を窺わせるものである。鉄滓はSD45の内、中央部の遺構が集中する28-29-45-46G付近での出土が顕著である。SD28及びSD30付近でも出土しており、先の羽口と呼んでいる。

当時の装飾品か直径1.6cmのガラス製丸玉（緑青状の錆が所見）が調査区南の27-25Gから1点のみ出土した。古墳時代にさかのぼる可能性も指摘される。

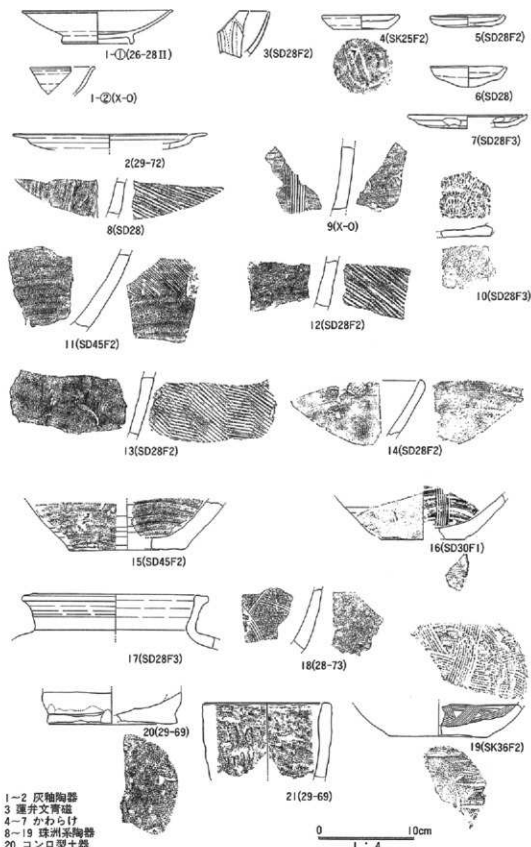
淡緑色の灰釉陶器は皿が2点出土している。口径16cmのものが調査区南28-28Gから、口径20.8cmと比較的大きい皿が調査区北の29-72Gからそれぞれ出土した。集落の構成員の階層を考究するうえで手掛かりを与えるものと思う。

遊佐町大樋遺跡で多く見つかった中世の代表的な輸入磁器である蓮弁文青磁碗が本遺跡でも1点出土している。かわらけが出土しているSD28からであり、やはりこの溝近くでの中世にかかる遺構の存在を想わせる。かわらけはSK25から1点、前掲SD28から3点出土した。SK25では炭化層の中からの出土で、一見燈明皿風である。

SD28溝跡からは中世陶器のメルクマルともいえる珠洲系陶器が出土している。器形としては壺・壺・撞鉢に限られる。何れも断片的なものであるが、中世前期鎌倉時代が想定される。また、調査区北の29-69Gからは内側に二次火熱の痕跡のあるコンロ型土器が2片出土したが、口縁部と底部の同一個体と考えられる。輪積み痕と指頭痕跡が見られる。庄内地方の遺跡では伊やカマ跡が殆ど検出されておらず、このコンロ型土器が使用されていたのではなからうか。



第18図 土錐・鐵羽口・砥石・丸玉実測図



第19図 灰釉陶器・珠洲系陶器他実測図

IV 出土遺物

表-1 出土遺物観察表

群像番号	器種	計測値(mm)				底面切離し	調査技法		出土地点・層位	備考	
		口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
11	土師器・内黒土器	高坪							SD28		
		環	80	40	38		ナデ・ミガキ	ミガキ	29-26	RP6 内黒	
		ニニチュア	30	18	21		手づくね	手づくね	SD45F2		
		蓋	204			8	ナデ	刷毛目	28-29II	3条の沈線あり	
		ニニチュア	54	40	42	2	ナデ	ヘラナデ	29-31II		
		蓋		109		10	ナデ	刷毛目	28-29II		
		環		102		10	ナデ・刷毛目	刷毛目	SD45F3		
		蓋	144			4	ロクロ	ミガキ	29-27	内黒	
		環		86		7	回転糸切り	ロクロ	SK32	内黒	
		環		58		7	回転糸切り	ロクロ	29-53	内黒	
12	土師器	環	136	90	37	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	132	89	28	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	142	84	38	3.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	134	80	42.5	5.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	132	88	29	5.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	112	26	37	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	136	81	42	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	136	84	35	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	139	82	34	5.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	130	80	35	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	134	90	38	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	140	44	36	5.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	137		39	6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	124	84	23	3	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		高台坪	124	82	45	7.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		高台坪	105			4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		蓋	155		28	8		ロクロ	ロクロ	SD00F3	
		環	143	97	26	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK32	
		環	142	88	32.5	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK32	
		環	124	78	33	6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK32	
		環	134	33	34	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK32	口縁に煤付着
		環		58		5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK32	
		蓋				8		ロクロ	ロクロ	SK32	
		蓋	140			6		ロクロ	ロクロ	SK32	
鉢カ	364			9		ロクロ	ロクロ	SK32			
環	135	73	37.5	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK36			
環	115	58	30.5	3	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK36			
環		70		5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD46F3			
環	144		38	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SD51			
環		56		3.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD53F2			
環	118	68		5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD54F2			
環	129	74	41	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD59			
蓋	168			8		ロクロ	ロクロ	SD59F2			
環	128	75	41	4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD59			
環		73		3.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD61F2			
高台坪	67			4.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD61F2			
蓋				6.5		ロクロ	ロクロ	SD61F2			
環	133	84	37	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	28-73II			
環	120	66	35	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	28-73			
環	132	54	49	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-74			
環	130	58	42	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-73II			
環		60		5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-73II	内面に煤付着		
環		71		3	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	28-73II			
蓋				12		刷毛目状文	ロクロ	27-72			
高台坪	106	80	48	5.5		タタキ	青海文	29-72			
蓋				10		タタキ	刷毛目	28-73II			
模範				10				29-72			
14	土師器	蓋	190			6		ロクロ	ロクロ	29-72	
		環	125	76	27	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	31-71	
		環	138	69	45	4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	31-71	
		蓋				5.5		ロクロ	ロクロ	29-70	
		環	122	68	35	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	30-69II	
		高台坪	120	69	49	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	28-69	
		高台坪	56			6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	30-69	
		高台坪	128	74	42	5		ロクロ	ロクロ	27-66	
		蓋	145		25	8.5		ロクロ	ロクロ	28-65II	
		環	134	100	32	6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD28	
		環	122	75	30	4		ロクロ	ロクロ	SD28	
		高台坪	118	68	76	6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD28	
		高台坪	53			5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SK37F2	
		環	144	94	34.5	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SD45F2	

表-1 出土遺物観察表

調査号	調査種	調査種	計測値(mm)			底面切断し	調査技法		出土土層・部位	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
1	土器・内黒土器	高坏	80	40	38		ナデ	ミダギ	SD03	RP6 内黒
2		ミニチュア	30	18	21		手づくね	手づくね	SD43F2	
3		蓋	204			8	ナデ	刷毛目	28-29II	3条の縦線あり
4	土器・内黒土器	ミニチュア	54	40	42	2	ナデ	ヘナデ	29-31II	
5		蓋	109			10	ナデ	刷毛目	29-31II	
6		蓋	102			10	ナデ	刷毛目	SD43F3	
7	土器・内黒土器	蓋	144			4	ロクロ	ミダギ	29-27	内黒
8		坏	85			7	回転糸切り	ロクロ	SD03F3	
9		坏	58			7	回転糸切り	ロクロ	29-53	内黒
10	土器・内黒土器	坏	136	90	27	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
11		坏	132	89	28	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
12		坏	147	84	28	3.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
13	土器・内黒土器	坏	134	80	42.5	3.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
14		坏	132	88	39	5.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
15		坏	112	26	37	4	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
16	土器・内黒土器	坏	136	81	42	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
17		坏	136	84	35	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
18		坏	139	82	34	5.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
19	土器・内黒土器	坏	130	80	35	5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
20		坏	134	90	38	5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
21		坏	140	44	36	5.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
22	土器・内黒土器	坏	137	39		6	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
23		坏	134	84	23	3	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
24		蓋台	124	82	45	7.5	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
25	土器・内黒土器	蓋台	105	44		4	ヘナ切り	ロクロ	SD03F3	
26		蓋	153			8	ロクロ	ロクロ	SD03F3	
27		蓋	143	97	26	4	ヘナ切り	ロクロ	SK32	
28	土器・内黒土器	坏	142	88	32.5	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SK32	
29		坏	124	78	33	6	ヘナ切り	ロクロ	SK32	
30		坏	134	33	34	4	ヘナ切り	ロクロ	SK32	口縁に保存釘
31	土器・内黒土器	坏	58			5	ヘナ切り	ロクロ	SK32	
32		蓋	140			6	ロクロ	ロクロ	SK32	
33		鉢	354			5	ロクロ	ロクロ	SK32	
34	土器・内黒土器	坏	135	73	37.5	5	ヘナ切り	ロクロ	SK36	
35		坏	115	58	30.5	3	ヘナ切り	ロクロ	SK36	
36		坏	70			5	ヘナ切り	ロクロ	SD46F3	
37	土器・内黒土器	坏	144			3.5	回転糸切り	ロクロ	SD51	
38		坏	56			3.5	ヘナ切り	ロクロ	SD53F2	
39		坏	113	68		5	ヘナ切り	ロクロ	SD54F2	
40	土器・内黒土器	坏	129	74	41	5	ヘナ切り	ロクロ	SD69	
41		蓋	168			8	ロクロ	ロクロ	SD69F2	
42		坏	128	75	41	4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD69	
43	土器・内黒土器	坏	73			3.5	ヘナ切り	ロクロ	SD61F2	
44		蓋台	67			4.5	ヘナ切り	ロクロ	SD61F2	
45		蓋	6.5				ロクロ	ロクロ	SD61F2	
46	土器・内黒土器	坏	133	84	37	5	ヘナ切り	ロクロ	28-73II	
47		坏	120	66	35	5	ヘナ切り	ロクロ	28-73	
48		坏	132	54	40	5	回転糸切り	ロクロ	28-74	
49	土器・内黒土器	坏	130	58	42	5	回転糸切り	ロクロ	28-73III	
50		坏	60			5	回転糸切り	ロクロ	28-73III	内面に保存釘
51		坏	71			3	ヘナ切り	ロクロ	28-73III	
52	土器・内黒土器	蓋				12		刷毛目	27-72	
53		蓋台	106	80	48	5.5		ロクロ	29-72	
54		蓋				10	タタキ	青磁文	29-72	
55	土器・内黒土器	椀	190			6	タタキ	刷毛目	28-73II	
56		坏	125	76	27	5	ヘナ切り	ロクロ	31-71	
57		坏	138	60	45	4	回転糸切り	ロクロ	31-71	
58	土器・内黒土器	蓋				5.5		ロクロ	29-70	
59		坏	122	68	35	5	ヘナ切り	ロクロ	30-69II	
60		蓋台	120	69	49	4	ヘナ切り	ロクロ	29-70	
61	土器・内黒土器	蓋台	128	74	42	5	ヘナ切り	ロクロ	30-69	
62		蓋	145			25	8.5	ロクロ	27-66	
63		坏	134	100	32	6	ヘナ切り	ロクロ	28-65II	
64	土器・内黒土器	坏	122	75	30	4	ロクロ	ロクロ	SD28	
65		蓋台	118	68	36	6	ヘナ切り	ロクロ	SD28	
66		蓋台	63			5	ヘナ切り	ロクロ	SK37F2	
67	土器・内黒土器	蓋台	144	94	34.5	5	ヘナ切り	ロクロ	SD45F2	

調査号	調査種	調査種	計測値(mm)			底面切断し	調査技法		出土土層・部位	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面			
15	土器・内黒土器	蓋台	142	66		3.5	ヘナ切り	ロクロ	SD45		
16		坏	126			7.5	ロクロ	ロクロ	SD45F2		
17		坏	126			9	ロクロ	ロクロ	SD45F2	跡形不明	
18	土器・内黒土器	坏	136	60	40	4	ヘナ切り	ロクロ	ロクロ	28-44	
19		蓋	143	53	35		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-43	
20		坏	132	42	40	4	ヘナ切り	ロクロ	ロクロ	28-43	
21	土器・内黒土器	蓋	150			30	4.5	ロクロ	ロクロ	28-43	
22		坏	123	84	34.5	6.5	ヘナ切り	ロクロ	ロクロ	27-41	
23		蓋台	126	88	43	3.5	ヘナ切り	ロクロ	ロクロ	30-27II	
24	土器・内黒土器	坏	129	49	35	3.5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	27-41	
25		蓋台	105			10	タタキ	ロクロ	ロクロ	27-27	
26		坏	207			7	ロクロ	ロクロ	28-74		
27	土器・内黒土器	蓋	149			5	ロクロ	ロクロ	31-71		
28		蓋	180			9	ロクロ	ロクロ	30-71		
29		蓋	174			7	ロクロ	ロクロ	27-69	土管状	
30	土器・内黒土器	蓋	148			6	ロクロ	ロクロ	28-43		
31		蓋	200			7	ロクロ	ロクロ	27-27		
32		蓋	155			7	ロクロ	ロクロ	28-26		
33	土器・内黒土器	蓋	240			7	ロクロ	ロクロ	28-23		
34		蓋	147			5	ロクロ	ロクロ	28-21		
35		蓋	130			9	タタキ	タタキ	SD00F3		
36	土器・内黒土器	坏	410	54	50	6	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SD00F3	
37		坏	428	52	46	6	ロクロ	ロクロ	SD00F3		
38		蓋	65			5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK32	
39	土器・内黒土器	坏	123	54	53	6	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
40		坏	119	42	45	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36F2	
41		坏	120	45	47	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
42	土器・内黒土器	坏	122	46	48	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
43		坏	128	49	48	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
44		坏	124	50	51	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-73	
45	土器・内黒土器	坏	128	52	53	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
46		坏	135	56	52	6	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
47		坏	133	59	38	6	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
48	土器・内黒土器	坏	63			7	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK36	
49		坏	142			7	ロクロ	ロクロ	SD45F2		
50		蓋	124	60	34	4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-73II	
51	土器・内黒土器	坏	129	74	30	7	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-73II	
52		坏	49			4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-76	
53		坏	47			7	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	28-38	
54	土器・内黒土器	坏	122	48	50	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	30-33II	
55		蓋	207			7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	27-22	
56		坏	160	77	35	3	ロクロ	ロクロ	ロクロ	26-26II	
57	土器・内黒土器	坏	208			5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	29-72	
58		椀				17	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SD28F2
59		椀	80	60	17	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK35F2	
60	土器・内黒土器	わ	80			12	ナデ	ナデ	SD28F2	刷毛目	
61		わ	81			22	ナデ	ナデ	SD28		
62		わ	125	80	13	4	ナデ	ナデ	SD28F3		
63	土器・内黒土器	蓋				11	タタキ	アテ	SD28		
64		蓋				10.5	ロクロ	ロクロ	X-4		
65		蓋				14	静止糸切り	ロクロ	ロクロ	SD28F3	
66	土器・内黒土器	蓋				17	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	SD45F2		
67		蓋				13	タタキ	アテ	SD28F2		
68		蓋				12	タタキ	アテ	SD28F2		
69	土器・内黒土器	蓋				13	タタキ	アテ	SD28F2		
70		蓋				16	ロクロ	ロクロ	SD45F2		
71		蓋				12	静止糸切り	ロクロ	ロクロ	SD30	
72	土器・内黒土器	蓋	196			8	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ	SD28F3		
73		蓋	105			12	ナデ	ロクロ・刷目	28-73		
74		蓋	105			10	静止糸切り	ナデ	刷目	SK36	
75	土器・内黒土器	コンロ	136			17	刷毛目		28-69	二次火熱	
76		コンロ	136			12	ナデ		28-69		
77		土器	136	47	41	4.5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SE35F1	刷毛目 RP10
78	土器・内黒土器	坏	122	55	47	5.5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SE35F2	刷毛目文字不明 RP11
79		坏	124	72							

6 遺物のまとめ

この度の発掘調査で出土した遺物は箱数で15箱ほどである。ほぼ畑地に限定されての出土であったが、多種多様の遺物であり、当地区のみならず庄内地方の平安・鎌倉期における集落の様相を窺うのに貴重な資料となり得る。最も多かった遺物としては須恵器があげられ、出土量全体の60%以上を占めている。集中的には調査区北からであり、とりわけS D30溝跡から多く出土した。最も古い推定年代としては9世紀初めと考えられる。やがて、この溝が埋もれるあたりから須恵器は供膳具で赤焼土器と共伴されるようになる。調査区北のS E35井戸跡やS B1 独立柱建物跡の年代がその時期にあたると思われる。須恵器に代わって、少なくとも供膳形態においては赤焼土器が主体的になってくる。SA 4柱列に代表される調査区南の遺構はこのあたりの時期に比定できるのではなからうか。勿論一方がなくなり、他方が新しく成立するという意味するものではない。こういった須恵器から赤焼土器への移り変わりは一般的には律令制的な生産・供給体制が崩れ、在地的なそれへの移行に対応するものと説かれている。

さらにS E40井戸跡を中心とする中世へと継統される。蓮弁文青磁やかかわけからは確かな在地勢力の成長が窺える。調査当初は平安時代の遺跡と考えられたが、これまでみてきたように年代的には中世まで拡大されることが瞭然となった。

加えて、S D28溝跡などから出土している高坏やミニチュア土器は奈良・古墳時代までさかのぼる可能性を示唆する遺物である。直接的に裏付ける遺構は検出されなかったが同じ下川地区の五百刈遺跡では古墳時代後期6世紀の堅穴住居跡を検出し、本遺跡との関連が注目される。

今後これら遺物と他地域との比較検討が必須の作業となる。とりわけ北陸での出土遺物との関わりが重要と考える。律令制下、出羽郡-出羽国の成立過程を考えるなら、やはり北陸とのつながりを看過できない。それは、最もりもなおさず遺物としての土器に着目することに通ずる。第15図4の赤焼土器甕は新潟県山三賀II遺跡における土管状土製品に類似している。この遺物は時的には奈良時代8世紀中葉をあてている。当地域と北陸との交流(関連)を示す遺物かと思う。

遺物からは古墳~中世までのものを含んでいる。これまで判然としなかった当該地方の奈良時代や鎌倉時代についても、ひとつの手掛かりを与えてくれることが期待される。

V まとめ

下川地区で確認されている遺跡群のほとんどが平安時代の集落跡と推定されたが、実際の調査では古墳時代から中世に及ぶことが判然となった。その意義はいうまでもなく大きなものがあり、庄内地方における律令制下の集落の様相を成立期から変質・解体~中世村落への展望をふくめて解明するために貴重な資料となり得るはずである。然もきわめて具体的に遺跡は提示してくれる。

さて、この度の発掘調査で明らかになったことをまとめてみたい。

調査区全体としてみれば、主体的には遺構・遺物からも平安時代の集落跡である。その集中的な検出或いは出土によって、調査区北・中央・南のブロックにわけられる。それぞれに時期的な差異が感じられる。遺構組成について、簡単に図示すると次のようになろう。

調査区北——9世紀初め…S D30・畝状遺構…S B1・S E35・S K32・S K36…11世紀
調査区中央——6・7世紀……………S D28……………S A2・S E40・S K25……………13世紀

調査区南——(6・7世紀)……………9世紀半ば……………S A3・S A4・S K21~23……………11世紀
本遺跡でみられる土器組成は年代的に土師素面器→ヘラ切り無調須恵器が主体→須恵器・赤焼土器煮沸形態→供膳形態での須恵器・赤焼土器共伴→赤焼土器主体・須恵器貯蔵形態→珠洲系陶器・かわけなど中世陶器という変遷が考えられる。これは先に図示した遺構組成と一致している。ただ、6・7世紀に直接関わる遺構は検出されなかった。

この西谷地遺跡は主に9世紀初めに成立した律令制下の集落跡である。しかし、その前後の存立も想定される。少なくとも13世紀までの営みは確認できる。ただし、集落が一連のつながりをもつかは不明の点が多く、残された検討課題である。

参考文献

- 川崎利夫他、1981年、『発掘野遺跡発掘調査報告書』、『山形県埋蔵文化財調査報告書46集』(以下「集報文庫」と略す)
佐藤庄一他、1982年、『北田遺跡第2次発掘調査報告書』、『集報文庫53集』
佐藤庄一他、1983年、『新青森遺跡第1次発掘調査報告書』、『集報文庫67集』
所澤研次他、1985年、『大船入遺跡・矢野遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書』、『集報文庫127集』
佐藤 庄一、1993年、『五石河川遺跡調査説明資料』
野尻 汎、1984年、『千原原遺跡発掘調査報告書』、『集報文庫80集』
斎藤尚己・山崎善治、1984年、『東北地方の河口埋立遺構について』、『北奥古代文化』第6号
佐藤 庄一、1990年、『出羽国(なりたちと南陸)』、『南陸市史』上巻 第5・6巻、南陸市
吉岡 康博、1982年、『北陸・東北の中世陶器をめぐる諸問題』、『庄内考古学』第18号
亀田 龍之、1974年、『古代の動植物とその性格』、『日本経済史大系1』古代、東京大学出版会
浪谷 孝雄、1989年、『下兵庫遺跡発掘調査報告書』、『集報文庫145集』
伊藤 邦弘、1988年、『大船遺跡第1次発掘調査報告書』、『集報文庫121集』

報告書抄録

ふりがな	にしやちいせきほくつちようきゆうこくしよ							
書名	西谷地遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	斎藤俊一・飯塚 稔							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしやち 西谷地	やまがたけんしやちいせきほくつち 山形県鶴岡市 おほしやちいせきほくつち 大字下川 あざにしやち 字西谷地	6203	平成3年 度登録	38度 46分 38秒	139度 46分 38秒	19930511~ 19930720	3,400	主要地方道 酒田鶴岡線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西谷地	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡 土壇 畝状遺構	土師器高坏・埴 内黒土器坏・蓋 須恵器(含黒書坏) 赤焼土器(含黒書坏) 灰輪陶器 土鏡 合口甕棺		赤焼土器の合口甕棺が 出土。 古墳~中世までの遺物 を含む溝跡が検出。 鉄滓の出土により鍛冶 場の存在が想起される。		
		鎌倉時代	井戸跡 溝跡	青磁(夏井文) かわらけ 珠洲系陶器				

図 版



遺跡全景（北から）



遺構検出状況（南西から）



遺構検出状況（北東から）



SD30土層断面（西から）



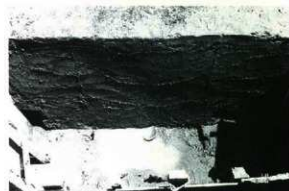
SD30完掘（西から）



SD28・45完掘（北から）



SE35赤焼坏出土状況（南西から）



SE35土層断面（南西から）



SE35井戸枠（西から）



SE40検出状況（東から）



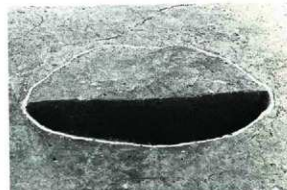
SK21土層断面 (南西から)



SK22土層断面 (南西から)



SK23土層断面 (南西から)



SK25土層断面 (南西から)



SK32完掘 (西から)



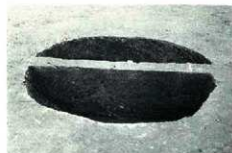
SK36完掘 (西から)



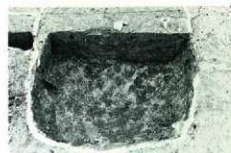
SK37土層断面 (南西から)



SK38土層断面 (南西から)



SK39土層断面 (南西から)



SK47土層断面 (南から)



SK55土層断面 (南から)



SK56土層断面 (南西から)



SD52 (西から)



SD53 (西から)



SD54 (東から)



SD59 (西から)



畝状遺構 (東から)



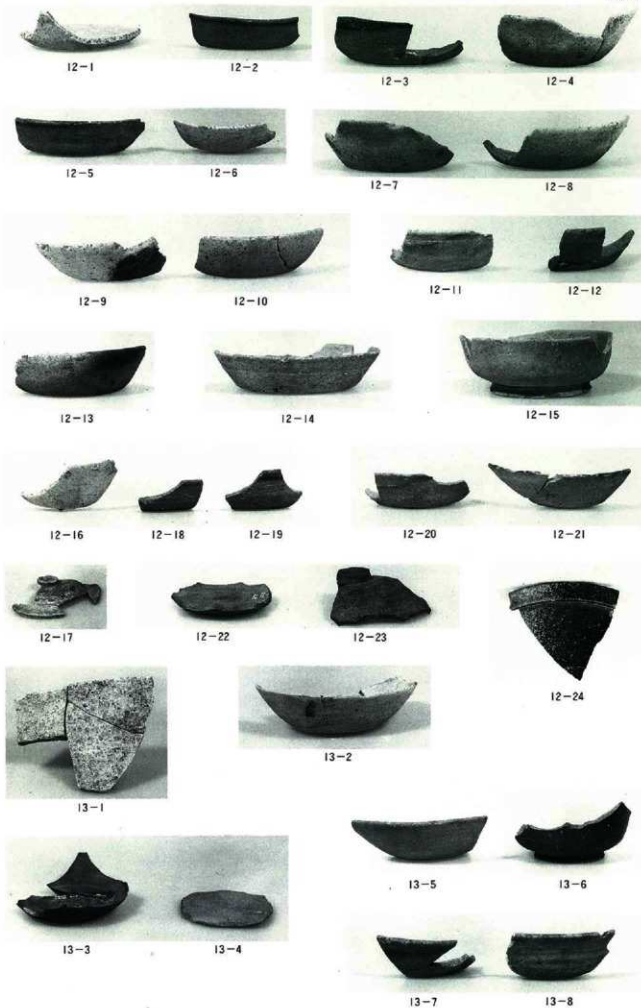
合口渠槽出土状況（東から）

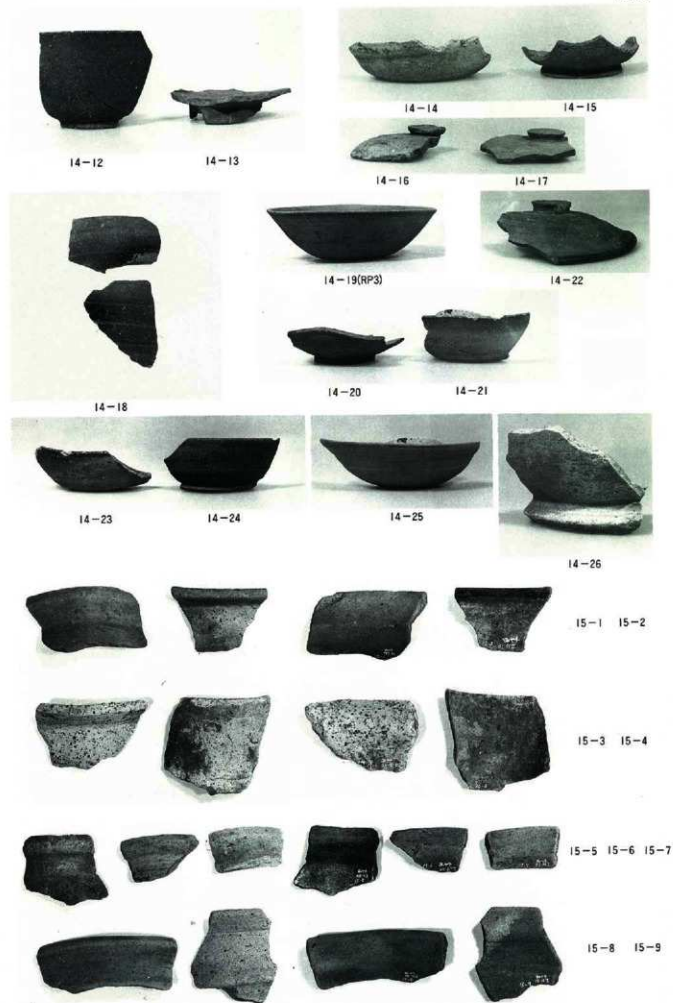
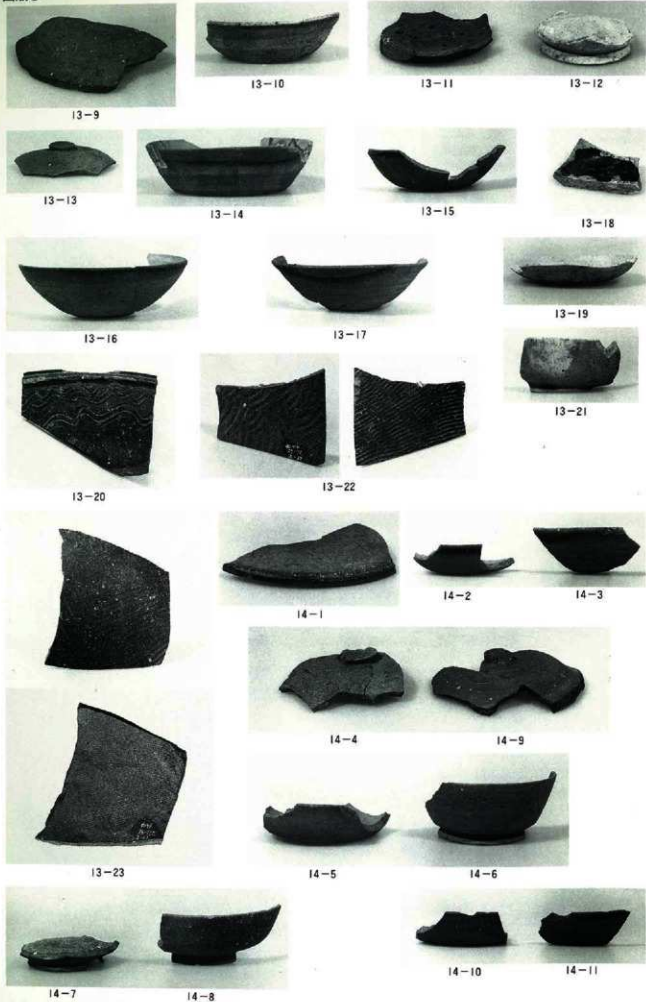


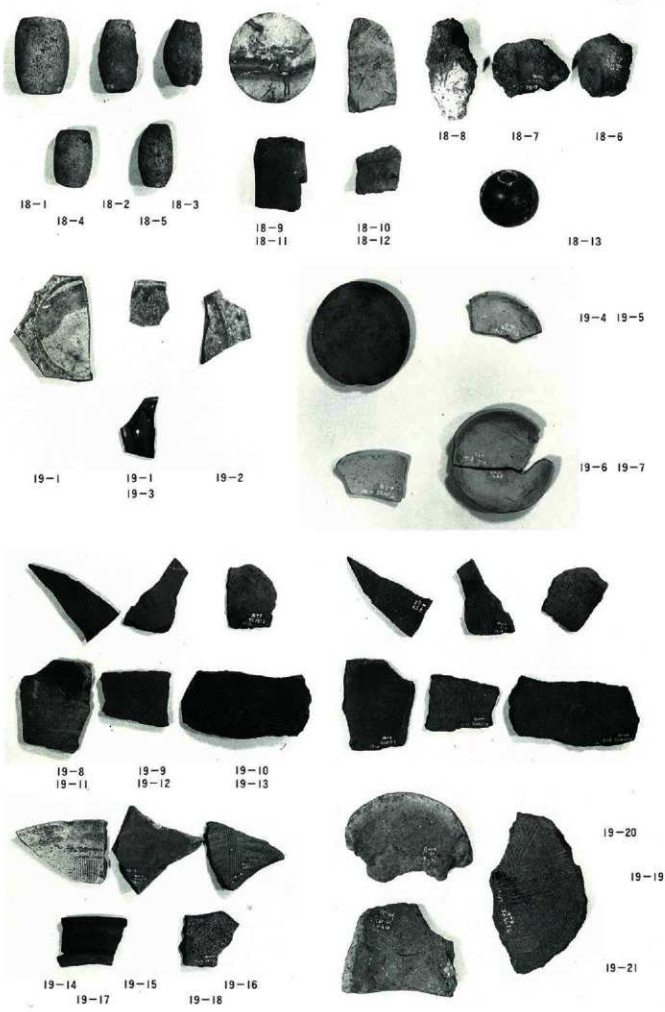
RP3須恵器出土状況（西から）



RP6内黒環出土状況（東から）









7-1



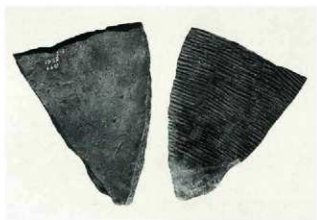
7-2



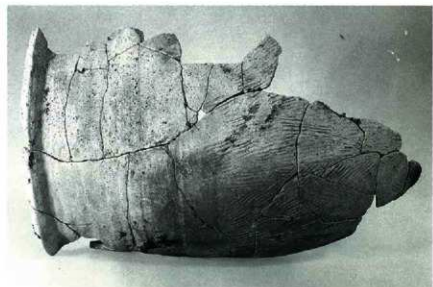
7-3



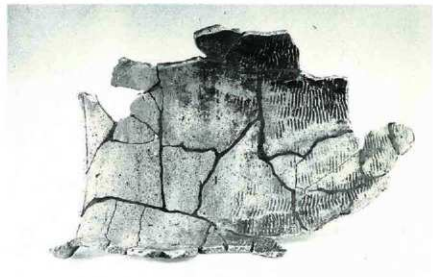
7-4



7-5



17-RP2



17-RP1



17-3

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集

西谷地遺跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 山形印刷株式会社